

日本薬剤学会 (APSTJ) ニュース

9

第67回FIPコンGRESSが北京で開催

World Congress of Pharmacy and Pharmaceutical Sciences 2007

社団法人日本薬剤学会会長
国際薬学連合 (FIP) 副会長
京都大学大学院薬学研究科

橋田 充

MITSURU HASHIDA

Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Kyoto University



はじめに

日本薬剤学会は国際薬学連合 (International Pharmaceutical Federation : FIP) の学術部門 (Board of Pharmaceutical Science : BPS) の創設初期からのメンバーとして、わが国の薬学の研究・教育の国際的窓口として機能するだけでなく、世界薬学会議 (PSWC) の企画・運営をはじめ、開発途上国における保健増進、薬事行政の国際調和、医薬品産業の育成、アジア各国との研究協力、交流等に向けた諸活動を通じて、世界規模での薬学発展に向けた活動を推進している。

このたび、第67回FIPコンGRESS (World Congress of Pharmacy and Pharmaceutical Sciences 2007) が盛会裏に終了したので、その概要を報告する。

1. 第67回FIPコンGRESS (北京)

今回のコンGRESSは、東京、シンガポールに続いてアジアで開かれる3回目のFIPコンGRESSとして、8月31

日から9月6日の間、北京で開催された。本会議は、中国薬学会 (Chinese Pharmaceutical Association) が今年発足100周年を迎えることから、中国関係者の強い希望によって実現したものである。1年後にオリンピック開催を控えインフラ整備も進んでいることも開催理由にあげられていたが、これについてはむしろオリンピック開催準備の一環であったかもしれない。

参加者は全体で約80カ国、3,000人を超え、中国の薬剤師・薬学研究者も広い国土の各地から多数参加した。日本からも事前登録段階で70人、最終的には同伴者等も合わせると100人に迫る参加者があったが、フランス、デンマーク、あるいはアメリカ等の参加者は遠隔の地であるにもかかわらず100人を大きく上回り、これらの国における薬剤師職能、薬学研究的厚みがうかがわれた。会議場は、北京市中心部からは40kmほど離れた郊外にあり、会議場と宿泊ホテルとが一体化されていたので一般セッションへの参加は便利であったが、ソーシャルイベントはすべて北京中心部であったため、毎日約3時間

をかけてバスで移動することとなった。

会議のオープニングセレモニーは天安門広場に面した人民大会堂で開催され、FIP会長のKamal Midha博士の基調講演等に加えて、中国國務院副総理である呉儀女史や中国FDAの長官から歓迎の挨拶があった。また、薬学研究者に与えられる最高の賞でかつて永井恒司先生も受賞されたHøst-Madsen Medalがナノパーティクル等の研究で日本でもおなじみのPatrick Couvreur教授(フランス)に授与され、合わせて職能部門の賞やフェロー称号の授与も行われた。一方、会議最終日のディナーは万里の長城で開催され、約1,000人が参加したが、風景のみならずすべてがスケールの大きなものであった。また、ディナーに先立ち恒例のJapanese Reception がFIP幹部、日本人参加者、現地企業駐在員等150人余りを集めて開催され、本年度準備担当の日本薬学会の内海英雄会頭やKamal Midha氏らの挨拶と懇談が行われた。

2. FIPの活動とWHO

FIPは、WHOを通じた世界の保健行政との一体的な活動、The World Health Professions Alliance(WHPA)を基盤とした、世界医師会(医学会)、看護師会、歯科医師会との協調、いろいろな製薬関係団体、あるいは行政当局との共同活動等、非常に幅広い活動を行っており、組織は、BPSと職能部門のBPP(Board of Pharmaceutical Practice)から成り立っている。FIP全体の運営や活動方針は、150余りの傘下組織、オブザーバーが一堂に集まるカウンシル会議で決定されるが、今年の会議で特徴的であったのは、WHOが非常に積極的に参加し、開発、使用、管理等、「薬」全般について、FIPをパートナーとすることを強く示したことである。Counterfeit drug(偽薬)や鳥インフルエンザ等の最も注目を集めているトピックスに加えて、GMPやBA/BE、BCS(Biopharmaceutical classification system)等レギュレーションに関連した問題、あるいは薬学教育のグローバル化等、多くの話題にWHOの関与が目立った。例えば、新薬開発においてはICHを舞台として国際的ハーモナイゼーションが図られているが、ジェネリック医薬品開発のルールであるBA/BEやBCSについてもWHOをプラットフォームとした国際調和が議論され、FIPでは今後さらにWHOと協力して、こうした問題についてのシンポジウム「Biointernational」やワークショップを開催し、世界規

模での高品質医薬品の提供に向けて努力を続ける。

3. BPSの活動

FIPの学術部門であるBPSに関しては、任期満了を迎えたSecretaryのVinod Shah博士(元FDA)の再任が認められ、また、BPSの新しいメンバー(PSMO: Predominantly science oriented organization)として、韓国、トルコ、カナダが加わることが承認された。これまで、日本(薬学会、薬学会)、アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリアに加え、ヨーロッパ薬学連合(European Federation for Pharmaceutical Sciences: EUFEPS)として参加するヨーロッパ各国がメンバーとなっていたが、今回3カ国を加え、さらに複数の国の学会が参加を希望していることから、今後BPSはさらに世界の薬学研究をリードする存在になるものと思われる。

また会議では、個別化医療(佐々木均長崎大学教授、栄田敏之京都大学教授)、BA/BE改善(山下伸二摂南大学教授)、ナノテクノロジー(川島嘉明愛知学院大学教授)等を主題とした学術シンポジウムが開催され、それぞれわが国の研究者が講演した。また、薬学全般では薬剤疫学(入村達郎東京大学教授)、天然物化学(本多利雄星薬科大学教授)、バイオテクノロジー(佐々木茂貴九州大学教授)、メディシナルケミストリー(井原正隆星薬科大学教授、藤井信孝京都大学教授)、医薬分業(山本信夫日本薬剤師会副会長)等の講演があり、さらに多くの日本人の先生が座長を務められた。

BPSは、毎年開催される本コンGRESSとは別に世界薬学会会議を3年間隔で開催しており、2004年の京都に続いて本年4月に第3回会議(PSWC2007)がアムステルダムで開催され、世界70カ国から約2,500人が参加して、世界の創薬科学、製薬行政を集約した盛大な会議となった。次回の世界薬学会会議は、2010年11月にアメリカのニューオリンズでアメリカ薬学会(AAPS)の年会と同時開催の形で開催されることが決定されている。

FIPのコンGRESSは、過去エジプト、ブラジル、中国で開催されたが、来年は久しぶりにバーゼル(スイス)とヨーロッパに戻り、2009年はイスタンブール(トルコ)開催となる。薬学におけるFIPのリーダーシップはさらに大きくなるものと思われ、わが国からもさらに積極的な参加が望まれるが、国際的な組織で活躍するためには継続的な貢献が何よりも必要で、若い先生方の一層の活躍が期待される。

